

第32期横浜市社会教育委員会議 第7回会議録	
日 時	令和2年10月29日（木）午前10時～12時
開催場所	横浜市庁舎18階 みなと4
出席者	有元副議長、石崎委員、大川委員、奥山委員、柿沼委員、菊池委員、小間物委員、七澤委員、牧野議長
欠席者	室田委員
開催形態	公開（傍聴人1名）
議 題	1 開会 2 議事録の確認について 3 議事 (1) 第32期横浜市社会教育委員会議提言の原案について (2) 提言の審議・策定
決定事項	議事録確認者に柿沼委員、菊池委員を指名。
議 事	(1) 第32期横浜市社会教育委員会議提言の原案について 資料に基づき、事務局から説明  (2) 提言の審議・策定  以下、（ ）は事務局より補足で記載しております。  <b>■質疑応答等</b>  牧野議長：これから新しい提案の中身について、審議に入りたいと思います。今回は最後の会議になりますので、この会議で皆さんにご意見をいただいて、最終的な提言書の内容を確定したいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。それでは、順番等は区切りませんので、ご意見がありましたら、お話しただけですでしょうか。 有元副議長：何度となく皆さんで議論したことですが、社会参加の定義の話で、特に3ページの表2の中にある対象の人、「どのような人か」のところ、「現在は社会参加していない人」みたいな表現なんですけど、ここで念頭に置いている社会参加が多少一般の使われ方よりも、拡張された使い方、拡大された使い方をしているの、やっぱり「社会参加していない人」がいる、というような認識が一般の読み手に引っかかるのではないかという気がする。社会参加と言ったときに、一番使われるのが「高齢者」とか「リハビリ」とか「障害者」とか、何かしていないことに対する反対語として社会参加って使われていると思うのですが、「リハビリ」や「高齢者」では外出することが社会参加と呼ぶと思うんです。家の外に出るようなこと。その物理的な社会参加から、拡張した大きな社会参加のことをしているの、読み手の誤解がないかなというのが少し気になる。相当丁寧に、ここで言っている社会参加はこういう定義だよというのを言う必要があるのではないかと、思いました。 牧野議長：今のご意見をうかがって、事務局からは、いかがでしょうか。 渡部係長：今の点についてごもっともだと思っているのですが、社会参加の定義の部分として、前回から引き続き直していない部分も含めて改めて確認したいのですが、2ページ目をご覧くださいますと、「本市における社会

参加のすそ野の拡大について」の後段ですが、『社会参加は様々なとらえ方が可能な言葉ですが、今期会議は社会と関わる最初の一步としてすそ野の拡大を議論することを踏まえ、本提言では社会参加を「市民が地域・社会の様々な活動に加わり、地域・社会の一員であるという気持ちを持つこと」と定義します。』とした上で、3ページのように事例を入れさせていただいているということで今までは進めていただいていたと思っています。

牧野議長：一応こういう定義と言いますか、枠で固定してきたということですが、いかがでしょうか。それでもやはり、今有元副議長がおっしゃったようなことで、ここまで引き上げるのではなくて、もう少しハードルを下げておくと言うか、もう少し受け取める方々を考えながら社会参加と言うものを考えたかどうかということだと思いますが、いかがでしょうか。

有元副議長：改めて表2の表現が引っかけたのかもしれませんが。「現在は社会参加していない人」というのがあるという前提に引っかけたのかもしれないです。この定義だと、気持ちも持っていない人ということになるから、相当強烈な人ですよ。

奥山委員：「社会参加しにくい人」とかにするといいのでしょうか。

有元副議長：そうですね、「(社会参加)しづらい人」とか。社会参加活動と拡張して使っている文脈もありますけどね。

柿沼委員：太字で本文に書いている、「地域・社会の様々な活動に参加していない人」というのを使ってはどうかでしょうか。

渡部係長：表2の「どのような人か」の欄について、承知しました。柿沼委員のおっしゃった本文に書いてある内容を加えようと思います。

牧野議長：気持ちがあってもなかなか一歩踏み出せない人、という感じだと一番いいかもしれません。例えば、高齢者の健康の調査などでも、社会参加というジャンルがあるのですが、そのほとんどが例えば、「町内会の草むしりに行く」とか、そういうのが社会参加の例で挙がっているのです。ですから、「一歩、家から外へ出てみる」というのが基本的な社会参加という考え方でもあるので、「気持ちがあっても一歩踏み出せない」というニュアンスが入るといいかもしれません。

渡部係長：では、そこは議長とこの後調整させていただきます。

牧野議長：他にご指摘がありますでしょうか。

小間物委員：表1の社会参画の部分ですが、法人の動きとして、今「CSR」から「CSV」に変わっているのではないかという感覚があるのですが、そのあたりはどうでしょうか。新たに入れたほうがいいのかどうか。

大川委員：企業側でもあまり定着していない部分があって、大企業で明確に「これからはCSV、『共通価値の創造』です」と言っているところもありますが、本質的なところを見ると、CSR自体を、特に中小企業はそうだと思うのですが、元々本業で地域や社会の役に立つということをやっているのです。CSVなんですよ。共通価値の創造はやっているのです。個人的な意見になりますが、CSVと言うと、みんな混乱してきてしまうので、CSR自体が地域や社会のお役に立つ活動で、それ自体がSDGsでゴールがはっきりしたというようなとらえ方で伝えるようにしています。

奥山委員：それ(CSV)を入れると、用語解説が必要になりますね。こめじるし(※)が増えるような気がします。

牧野議長：例えば、企業をベースに考えると、地元の企業で言うと、「雇用を創出する」というのもある意味CSVであったり、CSRであるわけです。そうすると、企業活動そのものが役に立っているのだという議論をしていく

と、この社会参画の文脈とは違う議論になるのかなという感じもします。そのあたり、CSR、CSV という表現も含めていかがでしょうか。

小間物委員：あまりこだわってはいませんが、世の中が CSV のほうに移行するという話をきいたことがあるので。

牧野議長：もう少し言うと、企業が「一市民として責任を果たす」というような、役割を担うというくらいの感じになるのでしょうか。イメージとしていかがでしょうか。

大川委員：法人の社会参画ということ言えば、言葉をわかりやすくして、『地域貢献活動をする』とすると、企業が地域に出て、地域に貢献するということが、法人にとっての社会参画だという意味につながる。

有元副議長：CSR 活動って、たぶんうちの学生たちは知らないです。

大川委員：すごくいろいろな言葉が出てくるので、経済界も混乱しているぐらいですから、市民はもっと混乱するかもしれないですね。

牧野議長：『地域貢献活動をする』くらいがよろしいでしょうか。定義のところが議論になっていますが、他にいかがでしょうか。

有元副議長：今のは「社会貢献」と「地域貢献」と、どちらが近いですか。

大川委員：「地域貢献」のほうが、地域に出ていく、参画するというイメージができますね。

奥山委員：内容のことではないのですが、14 ページの「目指すべき姿」冒頭の（書き出しの）始まりが、「以上のように」となると、また（前のページに）めくり直す感じがします。文章の問題だけなのですが。「以上のような」とせずに、冒頭がスタートしたほうがいいかと思います。前回のときにはそうになっていなかったもので、何か（文章が）うまくスタートするといいいのでは。「以上から」となると文章のつながりになってしまうので、「ここから始まる」というスタイルのほうがいいと思いました。

渡部係長：「社会参加のすそ野の見える化や人材育成と活用が行われることで」、という感じでしょうか。

奥山委員：そうですね。どうでしょう、みなさん。

渡部係長：この「行われ」までを削除しても意味は通じるとは思いますが、いかがでしょうか。

牧野議長：それでは、「以上のような方針のもとに施策が行われ」という部分を削除するということで、よろしいでしょうか。唐突感はないですか。

渡部係長：唐突感を払拭するには、通常ですと「社会参加のすそ野の見える化」の前に、なんとかなんとかかなど、という形で事例を入れるとわかりやすくなると思うのですが、前ページの施策のそれぞれの表題が、例えば「社会参加のすそ野の見える化」の部分ですと、「社会参加につながる情報の集約」ですとか、「情報の提供」という形で、具体例というより大枠の言葉となってしまうので、この部分を使うとしてもあまり意味がないと思います。もう少し突っ込んだ話を入れるかどうかということだろうと思うのですが。

菊池委員：その前の方針1を引っ張っている、あるいは、方針2を引っ張っているというのがわかればいいので、社会参加のすそ野の見える化、かっこ、方針1とか、人材育成と活用については方針2とか、入れるのはどうでしょう。また繰り返すのもどうかしらと思ったところです。

有元副議長：10 ページの『社会参加のすそ野の見える化』のところが、抽象度の高いモデル図はあるのですが、具体としてなにがなされるのかがわかりにくいと思いました。ポンチ絵のようなものがあったらいいかと思います。10 ページの図しなくて、実際に『見える化』というのは、何を

することなのかわからない。読み手にとって、これは何なんだろうと、具体像が見えないという気がしました。方針2のほうは、人材育成というのは言葉でわかりますが。実際、『集約』とか『提供』というのは何を指しているのでしたっけ。

渡部係長：11 ページの『社会参加につながる情報の提供』の1つ目を見ていただきますと、集めた情報をインターネットを活用したデータベースの公開とか、第5回会議で議論になりました「はまっ子グラマー」の例のように、SNS を活用して情報発信してはどうかというようなところです。情報を提供する方法も既存の方法ではなくて、新しい方法がいいのではないかと、2つ目の2項目のほうで『情報を受け取る側の様々な状況を踏まえた方法を活用・開発することが必要であり』と書いたのが例でございます。端的に申し上げますと、欲しい人にきちんと届く情報提供を行うことで雲が晴れるという感じのイメージです。

牧野議長：それでは、14 ページの議論は、菊池委員がおっしゃった形で、かつ書きで方針1、方針2、と入れておいて、『以上のような』の部分は削除するというところでよろしいでしょうか。その次に、10 ページの有元副議長からのご指摘ですが、皆さんいかがでしょうか。絵として、現在雲がかかった状態であるのが晴れるというイメージで作られています。情報の集約や提供というのはどういったことなのかということをもっと少し書いてみたらどうかというご指摘だと思いますが、いかがでしょうか。

柿沼委員：図のイメージだと、「現在」と「方針1」の図の間に、例えば掃除機で（雲を）吸い取っているような、いわゆる情報をどこかが集めてデータ化し、個々のところに行きわたる形になるような、もう一つ『何をしたいのか』というのが入ると『晴れた結果』というところに行けるのかなと思いましたが。雲がかかっているから、情報が見えにくいというのは表現できているが、その下の、情報が行きわたっているという状況になるために何をするか、要はこの施策が、どういう役割を果たすのか、みたいなものが図式化されるといいかと思う。

奥山委員：『情報の見える化』はとても大事だと思います。議論の中でも出てきたように、横浜市全市的なものと、生活圏域の区ごとのものと、もっと小さい中学校区のもの、いろんなレベルがあって、見たい方が、例えば「港北区菊名地区」とすれば、その活動が見えるというイメージなのかと思う。また、教育委員会だけではなくて、いろいろな部局との整合性もつけていくことも必要で、具体的に示そうとすると、いろいろと課題がある中なので、どこまでこれを提供するかということなのかな、と思いつながりながら話を聴いていました。どういうふうにしたらいいでしょうか。

牧野議長：何かイメージはありますか。

渡部係長：柿沼委員がおっしゃった、何かアクションをするという絵を挿し込むというのはあると思います。あとは、絵の下に文章をつけていて、いきなり『雲が晴れて』と始まっていますので、ここに雲を晴らすような表現を加えてみるという形はいかがでしょうか。

有元副議長：この「メガホンで騒いでいる」絵が、そのイメージなんですよね。

渡部係長：この絵は「元々いらっしゃる」のです。メガホンで騒いでいる方がこの雲の中に元々いるのです。足だけ見えているのです。

有元副議長：もっと素朴に、例えばチラシが置いてあるケースとか、町内の掲示板とか、WEB上のデータベースとか、そういうポンチ絵があってもいいかなと思ったのですが。そういうことが、情報の見える化と具体なんだと

いう例があったほうが良いと思います。

- 渡部係長：掲示板やスマホの絵など、そういうのを少し入れてみようと思います。
- 牧野議長：イメージとしては、『現在』と『施策によって』という間に、有元副議長がおっしゃったような絵があって、キョロキョロしている人がそれを見ているという絵があって、施策1によってこうなりますよ、というところで「わかった！」という感じになっているのがいいかもしれませんね。
- 奥山委員：8ページの、写真が載っている図のイメージでイラストが入るといいのではないのでしょうか。掲示板やら、パソコンの画面やら。
- 牧野議長：では少し工夫をしていただいて、検討します。
- 菊池委員：10 ページの話が出たので、そこでの文章のことですが、下線が引かれているところの中ほどに、『特に子どもが活動の主役になり、自己肯定感の向上につながる取組や』次の、『企業の従業員が誇りが持てる』というものの間に、「地域の大人」というのがあったほうがいいのかと思います。今まで地域の大人の話があり、企業の取組の話があったので、この文章だといきなり企業だけとなってしまう、「地域の大人」を取りこぼさないほうがいいのかと思いました。それと、12 ページに社会教育士のことが書かれているのですが、社会教育士は「資格」ではなく「称号」だということなので、そこは別紙（概要版）も直したほうが良いと思います。
- 牧野議長：「資格」ではなく、新たな「称号」です。
- 渡部係長：「資格」を「称号」に訂正します。
- 牧野議長：もう少し言うと、国の「養成課程」を修めたものというのは、「社会教育主事」の「養成課程」なのです。（社会教育）主事の任命については制度は変わっていませんので、社会教育主事養成課程を修めた者に新たに与えられるようになった「称号」だと入れていただいたほうが良いかもしれません。
- 大川委員：同じ箇所ですが、「団体」と入れておかななくていいのかなと思います。NPO も任意団体も含めて「働いている人」とか「活動している人」、その従業員さんや職員が誇りを持てる」とすると、（団体と）入れておいたほうが良いと思います。「企業、中黒（・）、団体の従業員が」という感じがいいのでしょうか。
- 渡部係長：ありがとうございます、加えさせていただきます。
- 牧野議長：今の箇所ですが、子どもが肯定感を持って、地域の方々が、これも肯定感を持つ、あとは従業員の方々が誇りを持てるというところで、もし入れるとすれば、やはり『お互いが認め合う関係』のようなものが大事だと思います。文章を考えなければいけません、相互承認関係に入るとい議論があると思います。後は、企業と団体の従業員、職員が誇りを持てる取組ということになると思います。
- 渡部係長：今の『お互いが認め合う関係』については、少し文章を加えるということで、相談させてください。
- 牧野議長：その他にいかがでしょうか。気になることや、「こうしたほうがいいのか」というご提案がありましたらお願いします。
- 有元副議長：感想なのですが、最後の『議長寄稿』が大変気に入りました。全体の流れをうまくまとめてくださって、この社会参加が増える過程がみんなの学びだと定式化しているのがすごくわかりやすいと思いました。
- 牧野議長：ありがとうございます。他にいかがでしょうか。
- 柿沼委員：今まで言ってこなかったのですが、提言の中に学校の位置付けみたいな

ものが、生活圏域としての学校、エリアとしての学校しか出てこないような気がします。今までの議論の中にもありましたし、活動の現場ということも考えて、学校が非常に重要だったのではないかという気がしていて、それが提言の中に盛り込まれてこないのが寂しい感じがします。

牧野議長：どんな感じで学校を入れ込んだらいいとお考えでしょうか。

柿沼委員：学校というのも一つの場として、あるいは機能として入ってくると思います。学校は社会教育の場として非常に重要だと思います。

石崎委員：今まで学校の中でやっていることについてお話をさせていただきました。「学校教育として」と言うこと、それから「教科の授業」のことだけではなくて、例えば「地域との関わりや企業との関わり」ということが総合的な学習の時間などで、「自分たちの将来を見据えて」ということで話をさせていただいています。学校だけで勉強していると言うよりは、職業講和、職業についてのお話をいただく。それから職場体験で、今年度は難しかったのですが、昨年度までは、いろいろな企業へ子どもたちが出掛けて、実際にやってみて、『仕事ってこんな大変なんだ』とか、すごく大人に親切に説明してもらうことで、大人の優しさやありがたみを知ることができたので、自分の将来を考えるということでは、地域や企業と授業以外で関わらせていただいている。そこを経て、地域でのボランティアなども紹介するというのをやらせていただいている。一文入るか入らないかというところですよ。

渡部係長：先ほど説明した部分ですが、12 ページの方針2の人材育成と活用の中で、「更に」という部分で『育成した人材の活躍を後押しすることや、交流する機会を設けるなど、人材が継続的に活動できるように支援することも必要です。特に学校などの生活圏域で子どもと大人が関わり合える場において、育成した人材の活躍の機会を積極的に増やしていくことが効果的です』ということで、今までは学校が地域とどう付き合うかということを進めてきた中で、最近では学校のほうが地域に出ていき、地域の方々に学校の子どもたちに触れていただくという時代になってきているところもあるのでこのあたりの表現を入れました。また、本日加えた9ページのコラムの2つ目ですが、(教育委員会では)「はまっ子未来カンパニープロジェクト」を小中学校を対象に行っておりまして、これは、特定の企業の皆様に特定の学校に行っていただいて、それぞれに学んでいただくという事業でもあると言っております。これはそもそも子どもたちの「キャリア教育」ということであるということも聞いています。文章では、大川印刷さんのユニバーサルデザインのカレンダー作りを通して、子どもたちにはユニバーサルデザインというのが何かということを経験しながら、これは日めくりカレンダーですが、1学級31人の子どもたちが、出席番号順に、学校の中で一番思い出の深い写真を入れたユニバーサルデザインのカレンダーを作ろうという提案を子どもたちと一っしょにされたという事例になります。そういった意味では、子どもたちがユニバーサルデザインとは何かを知ることができずし、大川印刷さんの従業員の方々が子どもたちと授業を介して仕事について触れるとか、できあがった成果物というのが、卒業アルバムだと1度見てしまってしまうのですが、こうした日めくりカレンダーですと毎日見るものなので、実際の利便性も踏まえた取組だと伺っており、大変素晴らしいなと思ったところです。学校との関わりという点では、こうしたことも加えさせていただいておりますが、いかがでしょうか。

有元副議長：これだけ学校の事例が出て、学校という言葉が一番この報告書(提言)

	<p>に出ているのだから、13 ページの施策2に、「学校教育と社会教育の連携」ということをまる（○）小見出しでいれてはどうですか。</p> <p>牧野議長：いかがでしょうか。例えば、中身として先ほどお話のあった職業体験や、子どもたちが自立をすることを地域社会が支えてきたということに加えて、最近のいわゆるコミュニティスクールでは地域学校協働活動の議論もありますので、それについては今後議論を深める方向で検討するですとか、この報告では学校に強く負担をかけることはできないと思いますので、そういう表現にしておくという対応もあるかと思うのです。また、先ほど10 ページで子どもが活動の主役になり自己肯定感を高めていくとか、地域と様々に関わって役割を担っていく、その関わりのなかに、学校との連携の強化のような言葉が入るとか、工夫できるかなと思うのですが、いかがでしょうか。</p> <p>菊池委員：今おっしゃられた通りだと私も思います。13 ページの『活動の機会の情報提供』という2重下線が引いてあるところの2点目の中黒に、正に学校連携のことが書かれているので、これを生かしながら工夫して小見出しを立てればいいと思います。</p> <p>柿沼委員：もし可能であれば、12 ページの『育成した人材の活躍の機会を増やしていくこと』と書いてありますが、「積極的に」という言葉を追加していただけるといいと思います。</p> <p>牧野議長：他にいかがでしょうか。</p> <p>渡部係長：「特に」の2番目の項目の上に、まる（○）で「学校教育と社会教育の連携」ということを入れて、この2番目の項目の文章を生かすということでもよろしいでしょうか。</p> <p>菊池委員：そういうことです。細かいところですが、13 ページの議論になったところで、『社会教育士の活用』が一番目に来ていますが、先に2番目の項目と学校連携が来て、『人材の交流の場』の前に『社会教育士の活用』が来るほうが、流れとしては読みやすくなるのではないかと思います。</p> <p>牧野議長：ありがとうございます。このような形でよろしいでしょうか。個人的には、皆さんにご議論いただいてとても良い物になってきたと思います。それでは、この後の提言の取り扱いにつきましては議長に一任させていただいて、事務局と再度やりとりをさせていただいた上で、最終的に確定とさせていただきますが、よろしいでしょうか。</p> <p>(異議なし)</p> <p>牧野議長：ありがとうございます。それでは、今後の施策に生かしていけるように、11月20日に教育委員会に対して提言を出したいと思いますので、よろしくをお願いします。それでは今日の議論はここまでさせていただきます。同時に、第32期横浜市社会教育委員会議を閉会とさせていただきます。ありがとうございました。</p>
資 料	<p>【配布資料】</p> <p>■第32期横浜市社会教育委員会議提言【全体】原案 資料1</p> <p>■第32期横浜市社会教育委員会議提言【概要】原案 資料2</p>